

きたと思う。

戦後の緊急食糧生産の一端をにない、今日の日本の繁栄に頑張ったのだという自負は、みんなが持っていることと思う。

私の戦争体験

北海道 高塚 稔

私は昭和十四年豊原で生まれる。十八年五歳のとき父が戦争で満州へ行くことになり泣きながら見送った記憶がある。戦争っておそろくなんのことかわからなかったと思う。廻りの大人達の話聞いて泣いている姿を見て恐ろしさ、淋しさなど子どもながらに感じていたと思う。

二十年四月小学校へ入学する。戦争が激しくなってきた。飛行機が何十機も飛んでくる。低空飛行で屋根すれすれだったり電柱に触れて落ちたりする。飛行機の音を聞いたたび、逃げ回っていた。

十日ほど防空壕での生活が続いた。昼となく夜となく爆弾が落ちるその地響きで土が頭から降ってくる。外を見ると空を真っ赤に染めている。防空壕も危なくなり馬車で家族と近所の人二十人ぐらいで山奥に逃げる。途中飛行機の音がする。大人の一人がB29だと大声で馬車から降りろ……と叫ぶ。ころげ落ちるように林のなかへ逃げ込んだ。山奥に何日いたか記憶にないが静かになり皆んなで馬車で自宅へ戻る。間も無くラジオから終戦の詔勅が流れ、子供ながらに嬉しかったのだろう外へ飛び出し騒いだ記憶がある。

昭和二十年八月十五日終戦を迎え、父も満州から帰って来た。ロシア人もつきつきと村に来了。兵隊が銃を片手に家へはいってくる。天井に銃を向け撃つ。外が見えるほどの穴が五ツ六ツ空いていた。このときも殺されると思うほど恐ろしかった。十月ロシアの子供が入学し教室を占領される。したがって日本の子供は外に出て遊ぶより仕方がなかった。この日はとても寒くあられが降り皆んな鼻水流し手足を真っ赤にして遊んでいた。思い出したくないことである。それからほとんど学校へは行か

なかった。ロシア人の子供と喧嘩すると親が銃を向ける。何度も経験しているがそのときは脅しだなどとは思わなかった。殺されると思い恐ろしかった。

二十二年九月日本国へ引き揚げる……と家財道具を送るのにトラックに積み、父と一緒に大泊港へ行く、ここから貨物船に積み込み船は汽笛を鳴らして港を離れる。あれで五、六百米も進んだだろうか。突然船が爆発した目の前で又もや恐ろしい光景を見せ付けられる魚雷に当たったらしい。火柱と共に海の底へと沈んで行く。当分日本国へ行く船は出ないらしい。父と自宅へ戻る。

十一月今度は真岡から引揚げる事となる。真岡に半月ほどいた。それは順番で船に乗り込み出航する。私は小高い丘の上から各船を見送っていた。ある日、いよいよ私達の番である。船に乗り込むとき私はお金を隠し持っていたが見付かり取られて叱られた。船は港を離れる。これで日本国へ行ける……と思ったがその後涙が出て止まらなかった。それは嬉しさよりここを離れる淋しさの気持ちが強かったように思う。ロシア人が沢山見送ってくれた。二十二年十二月十日日本国函館へ到着する。

本当に戦争って恐ろしい出来事である。二度と繰り返してはならないと思う。子供のときの恐ろしさが未だに脳裏に焼付いている。そのためか映画テレビでの戦争関係の物は一切見ることはない。見たくもない。今はただ地球上の平和を祈る一人である。

終戦と私の戦後

北海道 川上悦夫

樺太へ渡ったのは大正十五年の春。六歳のときである。長じて大泊郡遠洲村で父母に従い漁業を営む。父母は子供が大勢いたから大変苦労したようだ。

その頃は鯨漁が盛んで大漁が続いたが、私が学校を卒業して家業を手伝うようになった頃は鯨の回遊も少なくなり、遠洲湖に繁茂していた伊谷草を原料にした寒天の自家製造をしていた。寒天製造をすることになるまでには既存の寒天会社との間に数年争いがあってそれまでには父は漁業組合長を引き受けたこともあった。